

---

## 【第3回】 京都の天龍寺を開山した夢窓疎石のお墓が岡山県津山市

### 加茂町に？ - その3 -

---

夢窓疎石(むそう そせき)は、鎌倉時代末期の建治元年(1275)に生まれ南北朝時代に活躍した臨済宗の禅僧で、京都にある天龍寺を開山し、世界遺産に登録されている天龍寺庭園や、苔寺として有名な西芳寺(さいほうじ)庭園を作庭したことで知られています。

それではなぜ南北朝の頃の特徴を持った石造無縫塔(せきぞうむほうとう)や石造宝篋印塔(せきぞうほうきょういんとう)が岡山県津山市加茂町に残っているのでしょうか？

その理由について、津山藩士の正木輝雄(まさき てるお)は、美作国の東部6郡の地誌を調査して文化12年(1815)にまとめた『東作誌』(とうさくし)の中に、次のように記しています。

文殊堂は「松溪庵」(しょうけいあん)という名で小中原村(現在の津山市加茂町小中原)の成興寺(じょうこうじ)が持っており、行基(ぎょうき)作の文殊菩薩木造(もんじゅぼさつもくぞう)を安置している。お堂の後ろに古い墓が2基あって、左側は夢窓国師(夢窓疎石)、右側は宝山和尚(ほうざんおしょう)の石塔で、前に碑がある。夢窓国師の石塔は、仮の墓であるといわれている。〈大意〉

このことから、津山市加茂町塔中にあるこの石造無縫塔は夢窓疎石の仮の墓と伝わったこと、また隣の石造宝篋印塔は宝山和尚の墓であることが分かります。

なお、その当時「松溪庵」と呼ばれたこの文殊堂を持っていた小中原村の成興寺は今も津山市加茂町小中原に現存しており、江戸時代の元禄2年(1689)に津山西寺町の長安寺三世の白善嶺雲(びやくぜんれいうん、東作誌では「白禅霊雲」)が中興開山して以来、曹洞宗の寺院となりました。『東作誌』には、成興寺の開基は夢窓国師(夢窓



**成興寺**

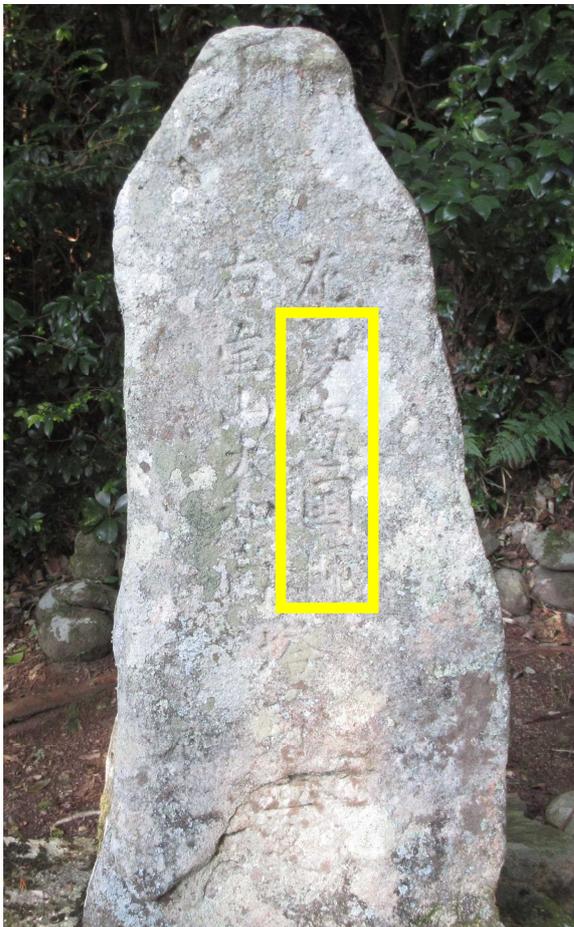
疎石)であり、夢窓国師が亡くなった観応2年(1351)9月晦日(みそか…末日のこと)の日付が入った位牌を同寺に祀っていることがあわせて載っています。

一方、「松溪庵」の創建された時期等については明らかではないものの、「松溪庵」(文殊堂)のすぐ後ろにある石造無縫塔や石造宝篋印塔がどちらも南北朝の頃のものと考えられることから、少なくとも南北朝時代には「松溪庵」(文殊堂)は存在していたと思われます。

また、「松溪庵」(文殊堂)は、京都の天龍寺の末寺であったといわれており、本山である天龍寺との間には、密接なつながりがあったことが考えられます。

この石造無縫塔について、「夢窓国師の仮墓なりと云う」と『東作誌』に記されていることから、夢窓疎石の生前に建てられた墓、いわゆる逆修塔(ぎやくしゅとう)の可能性が考えられますが、疎石の死後に建てられた可能性もあります。また『東作誌』に記された「仮墓」という表現が、夢窓疎石の分骨を埋葬した墓という意味か、それとも疎石の死を悼んで建てられた供養塔のような意味合いなのか、はっきりしません。

ただ、夢窓疎石が亡くなった観応2年(1351)は、まさしく南北朝時代(1337～1392)の真ただ中であり、疎石の「仮の墓」と伝わるこの「石造無縫塔」の建てられた時期と一致しています。



なお、この石造無縫塔と右側の石造宝篋印塔については、江戸時代、京都の天龍寺からわざわざ加茂の現地に調査に来て古記録と照合し、左側の石造無縫塔は夢窓国師のもの、右側の石造宝篋印塔は「松溪庵」開山の宝山大和尚のものであると認定したといわれており、夢窓疎石の仮の墓と伝わる石造無縫塔の左側手前には、宝暦12年(1762)に建てられた石塔に「左 夢窓国師、右 宝山大和尚 塔前立之」と刻まれています。

**宝暦12年に建てられた石塔  
(夢窓国師の名が見える)**

岡山県津山市加茂町塔中(たっちゅう)にあるこの石造無縫塔と石造宝篋印塔は、今も地域の人々によって大切に祀られています。(おわり)



**左から宝暦12年の石塔、石造無縫塔、石造宝篋印塔  
(樹木の右側は松溪庵の歴代住職の墓)**